

CONTENTS

秋季企画展 中津藩と蘭学の夜明け	2
後期企画展 津山藩最後の藩医 芳村 杏齋	3
オムニバス講演会	4
友の会の活動	5
NEWS FILE / 三津同盟の取り組み	6
資料館展示品から	7
INFORMATION (催し物のご案内)	8

洋学 資料館

No. 35
March, 2025

寛政4年(1792)10月19日、宇田川玄隨の指導によって作州で初めての人体解剖が実施されています。これに玄隨の推挙で参加した一人に田外玄洞という町医師がいました。玄洞の墓所は津山駅から国道53号線を4km南下した高尾地区の皿川と津山線に挟まれた狭い場所にあります。墓石には「清流院洗耳坊白蘿居士」、右側には「辞世 夢の間や覚めて浮世の衣替」、左側には「門人建立」、背面には「俗名 田外玄洞」と刻まれています。墓石に没年月日はありませんが、過去帳から文政7年(1824)8月2日であったことが分かっています。

文・写真：名誉館長 下山純正



津山洋学資料館
TSUYAMA ARCHIVES OF WESTERN LEARNING



秋季企画展

中津藩と蘭学の夜明け

■会期：令和6年9月28日(土)～11月4日(月・祝)

令和6年に出版から250年を迎えた『解体新書』は医学の飛躍的な発展と、「蘭学」の広まりをもたらしました。この事業に、中津藩医の前野良沢が関わったことは有名ですが、江戸の中津藩邸で始まったことはあまり知られていません。この企画展は、「蘭学・洋学 三津同盟」事業の一環として、「蘭学胎動の地」ともいえる中津藩の「蘭学」に注目しました。

「蘭学の泉はここに」では『解体新書』の基となった『ターヘル・アナトミア』を紹介しました。前野良沢や杉田玄白らが翻訳したこの本は、オランダ語版でしたが、もともとはドイツ語で書かれたものです。ここでは原著であるドイツ語版とオランダ語版を比較して展示しました。

「玄水と玄真」では、中津藩医 村上玄水に着目しました。玄水は九州で初めて腑分け(解剖)を行ったことで知られ、その成果は「解臟記」として残っています。玄水はこれを自身が心酔していた、津山藩医 宇田川玄真に送り、批評を依頼しましたが、玄水が送った手紙の下書きはあるものの、その後のやり取りは分かりません。この中津藩医 玄水と津山藩医 玄真の交流は、まさに「蘭学・洋学 三津同盟」を象徴する一品です。

「殿様の蘭学研究」では、そもそもなぜ、中津藩が「蘭学胎動の地」となり得たのか、その背景を中津藩主 奥平家と「蘭学」の結びつきから探りました。3代目 昌鹿は自身の母の骨折治療から「蘭学」に興味を持ち、前野良沢を長崎に派遣したほか、当時、高価だった蘭書を買いつけるなどの支援をしています。また5代目 昌高は自身も蘭学者で、日本初の日蘭辞書『蘭語訳撰』の編さんにも携わっています。

会期中には「森の芸術祭 晴れの国・岡山」が開催されており、県内外からたくさんの方々が、中津市の貴重な資料に見入っておられました。



後期企画展

津山藩最後の藩医 芳村杏齋

■会期・令和6年11月23日(土・祝)〜令和7年2月16日(日)

芳村杏齋よしむらぎょうさいは現在の真庭市蒜山上福田で代々医家をつとめる家に天保7年(1836)に生まれました。内科を江馬えま天江、江馬活堂かつどうに、外科を華岡南洋くわんなんやう、産科を船曳紋吉ふねひきむねきちに学びました。その後、さらに長崎へ出向きオランダ人医師ポンペから最新の西洋医学を習得します。一旦帰郷して開業しますが、今度は大阪に明治元年(1868)に設立された仮病院でオランダ人医師ボードインの元、さらなる研鑽けんざんを積むこととなります。そして同年、津山藩医の久原洪哉くわんせいかいらの推薦により津山藩最後の藩医の一人として取り立てられました。

明治6年(1873)に設立された現在の大阪大学病院である大阪府病院で医師としてつとめますが、体調を崩したため、その後津山へ戻り田町で開業しました。そこでの彼の評判はよく、患者から慕われていたようで、病院の門前に行列ができるほどであったと言われています。また、診察を望む人々は「先生に一度診察してもらえば、死んでも恨むことはない」と話していたという逸話が残されています。

杏齋は明治38年(1905)に70歳でこの世を去りますが、生前の深い親交から蔵書類などが津山教育科学博物館(つやま自然のふしぎ館)へ寄贈され大切に守られてきました。これらの資料は平成22年の新館開館を契機に、津山洋学資料館へ移管されています。

今回、没後120年を記念し、これらの資料などを中心に、芳村杏齋の生涯について紹介しました。

観覧された皆さまは、杏齋が残した蔵書類などを通して、当時最新の西洋医学を学び、津山でも活躍した杏齋に思いをはせておられました。

オムニバス
講演会

「洋学あれこれ Part IV」

1月26日(日)、学芸員による
研究報告会、オムニバス講演会
を開催しました。今年度は「洋
学あれこれ Part IV」と題し、
2つのテーマによる報告があり、
約60名の方にご聴講いただきまし
た。

まず、小島館長が「手紙から見
た箕作家一族の交流」というテー
マで、昨年度に呉家のご子孫から
ご寄贈いただいた資料に含まれて
いた手紙に注目して報告しまし
た。

呉白石(幕末に早世)が京都か
ら江戸にいる父親の黄石に宛て
て、自身の無事を知らせた手紙
は「八月十八日政変」の約1か月
後に書かれており、当時の緊迫し
た上方の状況を詳しく記していま
す。

箕作秋坪の長男の奎吾が、いと
この麟祥に宛てて何らかの依頼を
していた手紙は、明治初年に早世
した奎吾の自筆資料として、非常
に貴重なものです。

箕作阮甫が呉黄石に宛てた手紙



は、「梅莊」という場所へ出掛け
る約束について、体調が良ければ
予定どおり行けるであろうことを
知らせています。

数は少ないですが、互いに細や
かな気遣い・気配りをしつつ親族
間で親しく交流していた様子がわ
かる貴重な手紙です。

次いで、下山名誉館長と魚谷学
芸員の二人が「新たに確認された
宇田川榛齋肖像画の真相を巡っ
て」というテーマで報告しました。

宇田川榛齋は通称を玄真とい
い、江戸詰の津山藩医をつとめた
人物です。現在、彼の肖像画は武
田科学振興財団 杏雨書屋に収蔵
されているものが広く知られてお
り、こちらは宇田川家が旧蔵して
いたものでした。

このたび、新たに確認された肖
像画は、榛齋の一番弟子であつ
た坪井信道が所有していたもの
で、現在は東京大学大学院情報学
環図書館が所蔵しています。二つ
の肖像画を比較してみると構図は
非常によく似ていますが、東京大
学のものは口を開け、笑っている
ような印象を受けます。また、杏
雨書屋のものには見られない、賛
があり、賛の書き手は信道と親交
のあつた大岡寛(栗齋)によるも
のであること、さらに寛は玄真
が亡くなった2年後、天保7年
(1836)に38歳の若さで亡く
なっていることから、この肖像画
は玄真が亡くなった直後、天保6
年頃に描かれたと考えられ、杏雨



書屋の肖像画よりも古い時期のも
のである可能性が高いことが紹介
されました。

聴講者の皆さんは興味深く解説
に耳を傾けながら、画像に見入っ
ておられました。

今回ご紹介した手紙や肖像画
は、今後、企画展などでお披露目
できるよう、さらに研究と分析を
行っていくしますので、ぜひご期待
ください。

友の会
の活動

第37回史跡見学会

旧柵原・美作町の洋学史跡を訪ねて

12月8日(日)、第37回史跡見学会を実施しました。今回は、旧柵原町・旧美作町にある洋学関係史跡を見学しました。

最初の見学先は、羽仁の能勢道仙の墓所です。能勢道仙は石見国の浜田藩医だった人物で、第二次幕長戦争で浜田藩が美作に逃れて来てからは、羽仁で生活をしていました。道仙はこの地で「猶興舎」という講学の間を開き、近隣の農商家の若者や青年士族たちに陽明学の講義を行っていたようです。

次に、百々にある北和気郷土資料館に向かいました。この施設は元々、小学校だった建物を資料館として活用しています。展示品は民具などの昔の生活用品が主でした。

続いて、北和気郷土資料館から歩いて程近くの華蔵寺に向かい、裏手にある村医者草苅又玄の墓所を訪ねました。又玄に

ついでの詳細は不明ながらも、古医方系の漢方医だったと考えられています。



書副の岡崎家墓所

午前中最後に、旧柵原町書副にある坪井信道門人の岡崎帰一の墓所を見学しました。坪井信道は江戸後期に活躍した医者で、宇田川玄真に入門して西洋医学を学んだ人物です。その信道のもとで学んだ岡崎帰一の墓は、書副の丘陵上にある岡崎家墓地の中にひっそりと建立されています。

午後は昼食を湯郷で取った後、旧美作町林野の寿林寺を見学しました。本堂裏手の一番奥まった一隅に箕作阮甫の妻登井の両親の墓が並んで建っています。登井の父は本澤篤祐と名乗り、町医者をしていた人物です。

事前の天気予報では雨が心配されましたが、心配をよそに、当日は心地よい冬晴れの天候の中で、無事に見学会を終えることができました。

見学コース

- ①能勢道仙墓所(羽仁)
- ②北和気郷土資料館(百々)
- ③華蔵寺(百々)
- ④岡崎帰一墓所(書副)
- ⑤寿林寺(林野)



華蔵寺参道で記念撮影

友の会有志による
植栽整備ボランティア



12月14日(土)、友の会有志による資料館前庭の植栽整備ボランティアを行いました。1回目は5月に実施し、今回は、2回目になります。

師走も中頃の寒さの中でしたが、8名の会員の方に作業をさせていただきました。おかげで鬱蒼としていた薬草の小径がとてもさっぱりしました。

NEWS FILE

宇田川玄随への敬意を込めた
太田三郎氏の作品を展示

津山在住の現代美術家・太田三郎氏の作品「Seed Cards」(ウダカワ)を、3月4日から図書室で展示しています。

これは、エンジュ(槐)の種を手漉きハガキに埋め込んだカードが、エンジュの枝からたくさん垂れ下がった作品で、屋敷の庭にエンジュの大木があったため、門人たちから「槐園先生」と呼ばれた宇田川玄随への敬意が込められています。ポート・アート&デザイン津山の開設時に初披露され、そ



の後、岡山県立美術館での回顧展でも展示されました。制作のため太田氏が種や枝を採取したエンジュの木は、かつて津山市上河原に植えられていた街路樹ですが、伐採されて今はありません。

昨秋の「森の芸術祭」開催以降、岡山県北での芸術鑑賞の機運の高まりから、愛好者の周遊や当館への関心の喚起になればという、太田氏のオファーによる展示です。当館ご見学の際は、中庭のイヌエングジュと合わせてご覧ください。

蘭学・洋学
三津同盟

令和6(2024)年度の取り組み

シンポジウムの開催
大分県中津市

9月7日(日)、「蘭学・洋学でまちづくり・ひとづくり・みらいづくり」と題した講演・シンポジウムが開催されました。これは、上廣倫理財団と中津市が主催し、「近世・幕末維新期『海洋国家』と『異国』研究会」(略称・海洋研)を誘致したもので、同盟締結記念事業として、令和4年度に津山市、翌5年度に津和野町で開催されています。

この催しでは、中津市から川寫整形外科病院理事長で研究者の川寫真人氏、津和野町教育委員会文化財係長の小杉紗友美氏、津山洋学資料館名誉館長の下山純正氏による講演と、海洋研の代表幹事である岩下哲典氏や事務局長の小林哲也氏を交えたシンポジウムが行われました。



シンポジウムの様子

当館への団体見学

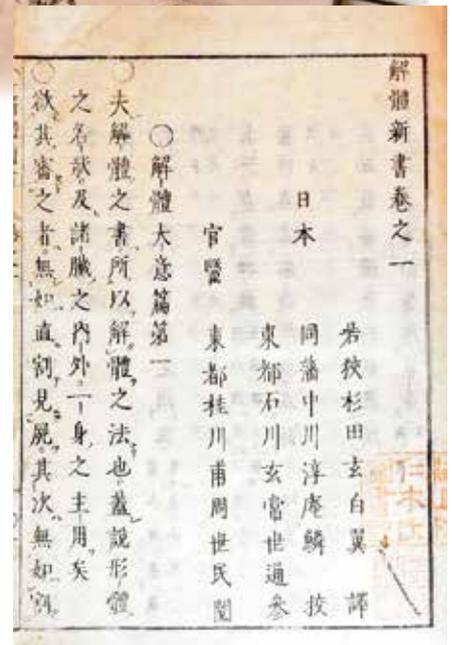
島根県津和野町

10月17日(金)、津和野町から日原郷土史研究会の会員7名が視察旅行で津山に來られ、当館を見学されています。ちょうど秋季企画展「中津藩と蘭学の夜明け」を開催中であり、三津町の歴史的な結び付きを改めて感じていただける絶好の機会となりました。

資料館展示品から

困難を極めた解剖書の翻訳

『解体新書』



序図1巻・本文4巻からなる『解体新書』の本文冒頭

「洋学」・「蘭学」と聞いて、イメージするものの一つに『解体新書』があります。

今から250年ほど前の明和8年(1771)、江戸の小塚原刑場で刑死体の腑分けが実施されました。そのとき立ち会った小浜藩医・杉田玄白と中津藩医・前野良沢は、それぞれが同じ解剖書『ターフェル・アナトミア』(著者はドイツ人のクルムス、そのオランダ語版)を持参した奇遇に感嘆しつつ、腑分けに臨んだと伝えられています。

刑死体の内臓を観察し、ち密に描かれた解剖図と見比べた玄白は「まるで鏡に映したようにそっくりだ」と興奮し、帰る道々これを

翻訳することを決意します。早速、翌日から長崎でオランダ語を学んだ経験を持つ良沢を囲んで翻訳が進められ、3年後の安永3年(1774)、ようやく『解体新書』の出版にこぎ着けたのでした。

玄白の回顧録『蘭学事始』を読むと、困難を極めた翻訳時の苦労をしのぶことができます。この事業の重要な点は、翻訳することによって西洋の進んだ医学を会得できたということでした。

そのころ、津山藩江戸屋敷に、先代から漢方医として仕えていた宇田川玄随という青年がいました。彼は、中国の医学を信奉してい

た漢方医たちと同様に「西洋の学問と中国の進んだ学問を同列に考えるのは愚かなこと」と思っていました。

しかし『解体新書』翻訳メンバーと交わる機会を得て、次第に西洋医学への関心を深めます。やがて日本最初の西洋内科書『西説内科撰要』(本誌第27号「展示品から」参照)を出版し、津山藩の洋学の先駆けとなるのです。

さて、当館に展示されている『解体新書』の本文冒頭(右の写真)を注意して見ていると、著訳者杉田玄白・中川淳庵・石川玄常・桂川甫周の名の上に、わざわざ「日本」と刻まれていることに気づきます。中国の漢方医学を意識し「西洋医学をアジアで初めて紹介したのは日本人の私たちだ」という、彼らの心意気が伝わってくるようです。

文：当館HP「洋学博覧漫筆」1から転載

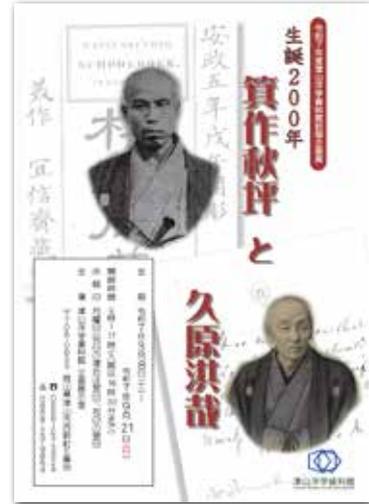
INFORMATION

令和7年度の催し物(予定)

企画展

4月	<ul style="list-style-type: none"> 前期企画展「箕作秋坪と久原洪哉」 12 第78回文化講演会 12 友の会総会 (休館日：14・21・28・30日)	3/8~ 生涯200年記念 箕作秋坪と久原洪哉
5月	(休館日：7・8・12・19・26日)	
6月	<ul style="list-style-type: none"> 友の会研修バス旅行 (休館日：2・9・16・23・30日)	
7月	<ul style="list-style-type: none"> 親子でヒンデローペンの作品づくり ヒンデローペン 絵付け体験教室 (休館日：7・14・22・23・28日)	
8月	<ul style="list-style-type: none"> むかしの学者もやった化学実験 人体のしくみとはたらきについて学ぼう！ (休館日：4・12・13・18・25日)	
9月	(休館日：1・8・16・17・22・24・29日)	~9/21
10月	<ul style="list-style-type: none"> 11 秋季企画展「幕末の津和野藩と蘭学(仮)」 (休館日：6・14・15・20・27日)	10/11~ 幕末の津和野藩と蘭学(仮) ~11/16
11月	<ul style="list-style-type: none"> 友の会史跡見学会 (休館日：4・5・10・17・25・26日)	
12月	<ul style="list-style-type: none"> 6 後期企画展「旅する洋学者(仮)」 6 交通史学会 津山大会誘致開催 (休館日：1・8・15・22・29~31日)	12/6~ 旅する洋学者(仮) ~2/15
1月	<ul style="list-style-type: none"> 26 オムニバス講演会 (休館日：1~3・5・13・14・19・26日)	
2月	(休館日：2・9・12・16・24・25日)	
3月	(休館日：2・9・16・23・24日)	

■ 企画展 ■ 催し物 ■ 講演会 ■ 友の会 ※催し物は予告なく変更となることがあります。なるべく資料館ホームページでご確認ください。



・ ・ ・ 刊行物のお知らせ ・ ・ ・

■ 洋学研究誌『一滴』第32号を刊行します

目次

- 日米修好条約締結を成就させたオランダ駐日商館長の“大貢献”
ードナル・クルナスによる対日外交政策への評価 … 小暮実徳
 - 令和5年度企画展報告
資料が秘めた物語Ⅳ
文明開化と明六社 ー津山・津和野・中津の思想家たちー
描かれた黒船艦隊
 - 動物学者、岡田信利研究序説
ー架載する「岡田信利関係資料」の紹介をかねてー
… 土井康弘
- 3月刊行 全82頁 500円

第78回文化講演会 開催

箕作阮甫と西洋兵学

講師：中央大学 文学部教授 鈴木直志 先生

日時：令和7年4月12日(土) 13:30~
会場：津山洋学資料館 GENPO ホール

ご利用案内

- 開館時間／9：00～17：00 (入館は16：30まで)
- 休館日／月曜日(祝祭日の場合はその翌日)
祝祭日の翌日・年末年始(12月29日～1月3日)

一般	一般(65歳以上)	高校・大学生
300円 (240円)	200円 (160円)	200円 (160円)

※()内は30名以上の団体料金です。
※小学生・中学生は無料です。



〒708-0833 岡山県津山市西新町5番地
TEL(0868)23-3324 FAX(0868)23-9864
URL <https://www.tsuyama-yougaku.jp>



● 交通のご案内

- ・JR津山駅から東循環ごんごバス南廻り線で12分、西新町下車徒歩2分
- ・中国自動車道 津山ICから車で15分・院庄ICから車で20分